令和元年度学校防災教育実践モデル地域研究事業の取組

伊予市教育委員会

1　取組の目的

この事業は、児童生徒等を取り巻く多様な危険を的確に捉え、児童生徒等の発達段階や学校段階、地域特性に応じた取組を展開し、地域や関係機関等との連携を促進することにより、地域全体にその成果を普及・推進するとともに、継続的で発展的な学校安全に係る取組を地域が一体となって進めることができる体制を構築するために実施する。

2　取組の内容

⑴　学校防災マニュアル等の再点検及び改善（５月８日）

今までは、担当者である教頭が見直し、全教職員で共通理解を図っていたが、それぞれの課題をいろいろな角度から見直すために、全教職員で再点検を行った。火災発生場所によって避難経路の変更を行ったり、担当者名を役職ではなく氏名に変えて役割を明確にしたりした。自分の担当箇所を中心に見直したため、今まで以上に内容を把握することができた。

⑵　避難訓練＋α

今年度は、関係機関等の協力をもとに、「避難訓練＋α」を意識して年６回の避難訓練を行った。

①　地震避難訓練＋【煙ハウス体験、水消火器体験】（５月 14 日）

通常の避難訓練後に、伊予消防署の協力により、煙ハウス体験、水消火器体験を行った。学校からの案内や公民館便り等を活用して、保護者や地域の方々にも参加を呼びかけたところ、30 名あまりの方の参加があった。救助袋体験や起震車体験も予定していたが、雨のため今回は実施できなかった。

【身を守る行動】

【水消火器体験】

【保護者・地域の方も体験】

② 引き渡し訓練＋【防災ミニ集会、防災体験学習】（６月２日）

昨年度の反省から、例年２月に行っていた引き渡し訓練を、年度の早い時期（６月）に行った。毎年行っていることもあり、スムーズに引き渡しを行うことができた。引き渡し訓練後、運営委員会による防災寸劇や親子で参加できる防災クイズなどの防災ミニ集会を行った。

その後、防災体験学習として県や市の危機管理課の方による防災に関する講話、簡易模型実験、土石流３Ｄシアター体験、防災マップ説明、降雨体験を実施した。児童は、興味をもってそれぞれのブースを回り、実際に体験することで、実感を伴った理解につながった。また、保護者や地域の方も一緒に学習することで、地域全体の防災意識を高める意味のある活動となった。

【引き渡し訓練】

【防災ミニ集会】

【簡易模型実験】

【土石流３Ｄシアター】

【防災マップ説明】

【降雨体験】

③ 緊急地震速報＋【垂直避難】（11 月１日）

今回は緊急地震速報による訓練とその後土砂災害の危険があるという想定で実施した。伊予市のハザードマップによると、学校の南東にある山が崩れ、校舎の１階に土石流が流れてくるという想定になっている。そのため、校舎の２階以下にいる児童は上階である３階への避難を行った。

【非常食保管ケース】

今までは、児童用の非常食を校舎１階保健室に保管していたが、避難の際、上階への運搬が困難であるため、３階資料室へ保管することとした。また、非常食保管のケースは、誰が見てもわかるように大きく表示することにした。

⑶　救命救急講習（５月 22 日、７月８日、７月 16 日）

毎年、水泳指導が始まる前に、教職員を対象とした救命救急講習と事故に備えたシミュレーション研修を行っている。また、プール監視当番をする保護者全員を対象に、夏休みまでに救命救急講習を実施し、昼の部と夜の部のどちらかに必ず参加していただいている。毎年、受講しているため、消防署の方からお褒めの言葉をいただいている。

【救命救急講習】

⑷　少年消防クラブ（５月～３月）

４年生は、年間４回の少年消防クラブの活動や消防署での体験活動、広報活動を通して、防災に関する知識・技能を高めている。６月は、ホースを伸ばしたり巻いたりする体験と消防服着衣を行った。また、「少年消防クラブで学んだことを友だちや家族、地域の方々に伝えたい」という児童の願いから、三世代交流学習発表会において少年消防クラブで学習したことを劇にして発表した。防災に関する知識・技能の向上とともに、消防体験を通して得た学びを他者へ発信しようとする気持ちの高まりも見られるようになった。

【入団式の様子】

【消化ホースの準備指導】

【発表の様子】

⑸　防災に関する授業研究（６月 26 日）

６月に、防災に視点を置いた授業研究を行った。４年生の社会科では、非常持ち出し袋の中身を考える学習を２時間扱いで行った。前半は、DCM ダイキ(株)の出前授業で、災害が起きた時に困らないようにするにはどうすればよいかを考えた。動画を視聴して家具の固定の必要性を学んだり、非常用持ち出しリュックの重さを実際に背負って確認したりした。後半は、前半の活動を生かし、非常用持ち出しリュックに何を入れるかを個人で考え、グループ・全体へと広げた。授業後は、家庭でも話し合う機会をもってもらったことで、非常用持ち出しリュックを準備する家庭が増えた。学習したことを家庭へ広げる取組を、繰り返して行う必要を感じた。

【全体での話合い】

【防災グッズカード選び】

【防災グッズを詰める体験】

⑹　教職員研修

①　校長講話（５月８日）、外部講師講話（11 月 20 日）

この事業の研究推進計画を進めるにあたり、平成 30 年７月豪雨の時に松山市立怒和小学校に勤務していた校長が経験したことについての講話を聞いた。災害を未然に防ぐことの大切さ、自分の命を自分で守れる児童の育成の大切さを学び、推進計画に盛り込んだ。

また、11 月には、昨年度の西日本豪雨で学校の一部が水没した元吉田中学校校長をお迎えして、研修を行った。学校として初動対応の教訓、全国から来られたボランティアの方々への感謝の気持ちが生徒を大きく成長させたこと、自分が大切にされていることや自分たちが復興に向けてできることに取り組んだことが生徒一人一人の自己肯定感や自己有用感の高揚になったこと、そして何より、学校と地域の絆がとても重要であることを教えていただいた。

【講話の様子】

②　先進地視察（８月７日）

平成 30 年７月豪雨災害における広島市の対応を学ぶとともに、被災地を実際に見て見識を深めるために、拠点校である伊予市立南山崎小学校職員等 10 名で先進地視察を行った。広島市危機管理室の室長から、豪雨災害が発生した時の気象状況、被害状況、災害応急対応、被害者支援、応急復旧について話していただいた。避難所にエアコンを設置したが、個人差があり、温度調節が大変だったことなど、実際に避難所運営をしてみなければ分からなかったことを教えていただいた。

検証と防災・減災対策についての話では、避難した理由として、家族に避難を勧められたからという理由が挙げられていた。このことから、子どもが避難しようと言うと、家族も避難することが分かった。また、自分の家族だけでなく、近所の人に避難を呼びかけることで、大勢の人が助かるということも教えていただいた。

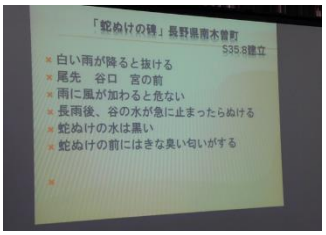
さらに、防災・減災対策として、過去に土砂災害や洪水の発生したことのある場所を、常時監視カメラによる情報発信をしていて、パソコンやスマートフォン等で、いつでも確認することができるような仕組みが作られていた。

最後に、災害から身を守る言い伝えが書かれた「蛇ぬけの碑」について詳しく話していただいた。先人たちは、土砂災害が起こる場所や前ぶれについて、石碑を残して後世に伝えようとしていたことが伺い知れた。

被災地の視察では、大きな岩石が下流まで流されている光景を目の当たりにした。間一髪で被害を免れた人の話では、濁流とは反対方向の山の中へ急いで避難したことで、命が助かったということだった。上瀬野地区の上流では、災害後、防災・減災対策としてセンサーが設置されており、センサーに岩などが触れると、地域一帯でサイレンが鳴るシステムになっていた。

平成 30 年７月豪雨から１年以上経過しているが、建物や塀には、濁流で浸水した跡がくっきりと残っていた。ガードレールが無かったり、道の端が崩れたままになっている場所があったりと、豪雨災害の凄まじさを物語っていた。

現地視察を通して、災害が起こる前の早めの避難がとても重要であることを改めて感じた。



【災害から身を守る言い伝え】

【上瀬野被災地視察の様子】

【上流に設置されたセンサー】

⑺　防災キャンプ（10 月５日、６日）

４年生以上の希望者を対象に「防災キャンプ」を行った。児童・保護者・教職員・関係機関・地域の方々・ボランティアスタッフ等、約 150 名が参加した。目的は、次のとおりである。

○　校区調査及び防災マップの作成を通して、地域の実態を知る。

○　体験を通して地域の社会の一員としての自覚を育てるとともに、防災の大切さを実感させる。

○　避難所における生活を通して、地域での支え合いや助け合いの必要性を学ぶ。

①　防災マップ作り

全体で防災マップについての説明を行い、まちあるきの方法やそれぞれの役割を確認した後、まちあるきに出発した。

まちあるきでは、地域の方、保護者、愛媛大学生と一緒に、児童の通学路を歩き、災害時に危険な場所だけでなく、素敵な場所も見付け、みかんカードやレモンカードに記入し、地図にチェックをしていった。班で話し合いながら行うことで、普段何気なく通りすぎている場所や、知らなかった場所などを見付けることができた。

帰校後、まちあるきで確認したことや気付いたことなどを拡大地図に写した。みかんカードやレモンカードを貼り、一番伝えたいみかんカードとレモンカードに花丸をつけた。さらに、１～３年生に伝えたい場所をメッセージカードに絵と言葉をかいて、地図上に貼付した。それぞれの班でまちあるきをした感想を述べる時間を設けたところ、「普段気付かなかったことが分かった」「もしもの時は安全に気を付けて行動したい」など防災への意識の高まりを感じる発言を多く聞くことができた。

班ごとに作成した防災マップを見せながら、一番伝えたいことを発表した。各地域の危険なところはもちろん、素敵なところを知ることで防災についての知識を得るとともに、新たな南山崎のよさを感じることができた。

【まちあるき】

【マップ作成】

【発表の様子】

② ペットボトルピザ作りと非常食の試食

ペットボトルの中で材料を混ぜ合わせ、生地を発酵させるペットボトルピザを段ボールで作った釜で焼いて昼食にした。生地を発酵させるためにペットボトルを振りながらダンスをしたり、ペットボトルから生地が出てくる時の様子に驚いたり、子どもも大人も楽しく活動することができた。段ボールとアルミで作る釜も、身近な材料で作ることができたことは驚きだった。カレーは非常食といえども味は十分満足でき、湯さえあればよいので、いざというときの備蓄食の便利さを実感した。

【ピザ作り】

【段ボール釜】

③　防災スタンプラリー

通学班を基本とした八つのグループが、１ブース 20 分間で八つのブースを体験した。各グループには、保護者、地域の方々、大学生も加わり、一緒に体験した。たくさんの関係機関や地域の方々の協力を得て、防災に関してたくさん学ぶことができた。

○　担架作り・応急手当等（伊予消防署）
○　救命救急法（伊予市女性消防団）
○　段ボールベット作り・非常食試食体験等（伊予市危機管理課）
○　土嚢つくり（伊予市消防団第１分団）
○　大声コンテスト（伊予警察署大平駐在所）
○　防災お天気クイズ（校区在住の気象予報士、防災士会）
○　簡易トイレ作り等（伊予市社会福祉協議会）
○　防災に関する読み聞かせ（民生児童委員）

【毛布を使った担架作り】

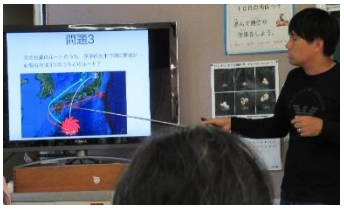
【曲に合わせた手順確認】

【段ボールベットの土台作り】

【非常食の試食】

【土嚢作り】

【大声コンテスト】



【防災お天気クイズ】

【簡易トイレ作り】

【防災に関する読み聞かせ】

④　段ボールハウス作り

家庭ごとに段ボールをカッターで切ったりガムテープで貼り合わせたりして、段ボールハウスを作った。窓やドア、表札を作ったり、屋根を乗せたり寝床に段ボールの枕を置いたりするなど思い思いの工夫を凝らし完成させた。

【段ボールハウス完成】

できあがった寝床に早速寝てみて、ほっとした表情を浮かべていた。自分の居場所を確保できたことで、安心していた。実際に体育館で寝てみると、咳や足音など音がよく響き、耳につくことが分かった。10 月初旬だったが、夜が更けていくにつれ気温が下がり、寝袋や寝具がないと寝られないのではないかと思った。避難所生活が長く続くのは本当に辛いことが想像された。

⑤　炊き出しと朝食作り

夕食は、更生保護女性会等による炊き出しで、おにぎり２個と豚汁の計 120 食分を作っていただいた。疲れた体には温かい食事が何よりもありがたかった。地域とのつながりを感じる機会となった。

翌日の朝食は、伊予市社会福祉協議会の方々による指導の後、身近にある食材を使って非常食づくり、切り干し大根のシーチキン和えとじゃがりこポテトサラダに取り組んだ。乾物の切り干し大根は水でもどし、缶詰のシーチキンマヨネーズをポリ袋の中で混ぜるとできあがり、簡単にできることに驚いていた。また、菓子のじゃがりこに湯を注いでしばらくおいたものをフォークでつぶすと、温かいポテトサラダができた。手軽で簡単にできることに感激した。

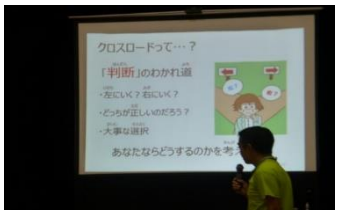
【炊き出し】

【簡単にできる朝食】

【じゃがりこポテトサラダ】

⑥　クロスロード

愛媛大学教授からクロスロードの話があった。災害時にはどうすればいいのか迷うことも起こる。いざという時、自分がどのような行動を取ればよいのか、主体的に判断することが大切である。質問に対する自分の考えとその理由、根拠をグループの中で話し合った。どちらの言い分にもそれなりの理由があり、どちらか一つにまとめることはできない問題ばかりだった。話し合うことで、自分の想定外に気付く機会になった。



【クロスロード】

【話合いの様子】

⑦　避難所レクリエーション

熊本県レクリエーション協会から、講師をお招きして、被災地レクリエーションの体験を行った。様々な活動を通して、他者と触れ合う楽しさや喜び、人とつながる安心感、そして笑顔になれることを学ぶことができた。

＜ペアやグループで＞

ペアになって先生の掛け声に反応し、ボールを取り合ったり、リズムに合わせて手遊びをしたりした。グループでは円になり、じゃんけんに勝てばボールを送り、２個ボールが来たら踊るゲームを行った。周囲の方々とコミュニケーションを取りながら活動し、笑顔があふれる活動になった。

＜新聞紙を使って＞

新聞紙を音楽に合わせて自由にちぎったり、ポンポンに見立てておもいっきり踊ったり、新聞紙を舞い上げて遊んだりした。また、大きなスカーフを全員で持って歩いたり、スカーフの中に入ったりして、大人も子どもも楽しむことができた。

＜オーケストラ＞

大きさの違う太鼓、トライアングルやウッドブロック、シンバルを使い、即興でオーケストラを結成し、「くるみ割り人形」を演奏した。その際、観客としてうちわやボール（鈴入り）を使って、楽器演奏に加わる工夫を行っていた。全員で音楽を演奏する楽しさを感じることができた。

【ペアやグループでの活動】

【新聞紙を使った活動】

【オーケストラの様子】

⑻　防災参観日（10 月８日）

毎年 10 月には、「いのちと人権」を考える参観日を実施しているが、今年度は「防災」をテーマとした授業公開ならびに講演会、防災教室を行った。

講演会では、講師として、文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官

のほか、文部科学省で五つの役職を務められている講師をお招きし、「『学校と地域の絆』～災害時における学校と地域の連携・協働に向けて～」と題して講演をしていただいた。3.11 東日本大震災時の映像、震災後に自ら活動を始めた子どもたちの姿、前を向き歩み始めた子どもたちの言葉など、実体験から語られるお話は、大人はもちろん、子どもたちの心にも強く響くものであった。

DCM ダイキ(株)による防災教室では、災害時に役立つ知恵として、新聞紙を使った防災スリッパの作り方や、避難所生活でのエコノミー症候群予防体操などを、低学年の児童にも楽しく分かりやすく教えていただいた。

【１年：じしんがおきたら】

【３年：土砂災害について学ぼう】

【５年：災害に備えよう】

【講演会】

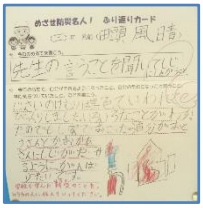
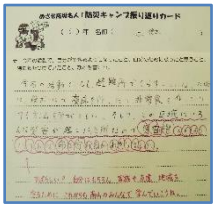
【低学年向け防災教室】

⑼　掲示コーナーの充実

階段の掲示コーナーを利用し、防災学習の写真や、児童の振り返り、今後の活動予定などを掲示した。その他にも、防災学習をテーマに児童が考えた謎かけや川柳も掲示した。

写真や言葉で視覚的に訴えることで、学びを深め、共有できることが分かった。また、川柳等で文字数を限定して振り返らせることで、学びを明確化し、他に伝えられることができた。「自分の命は自分で守る」というタイトルが印象に残る児童が多く、掲示のメッセージ性を利用できた。

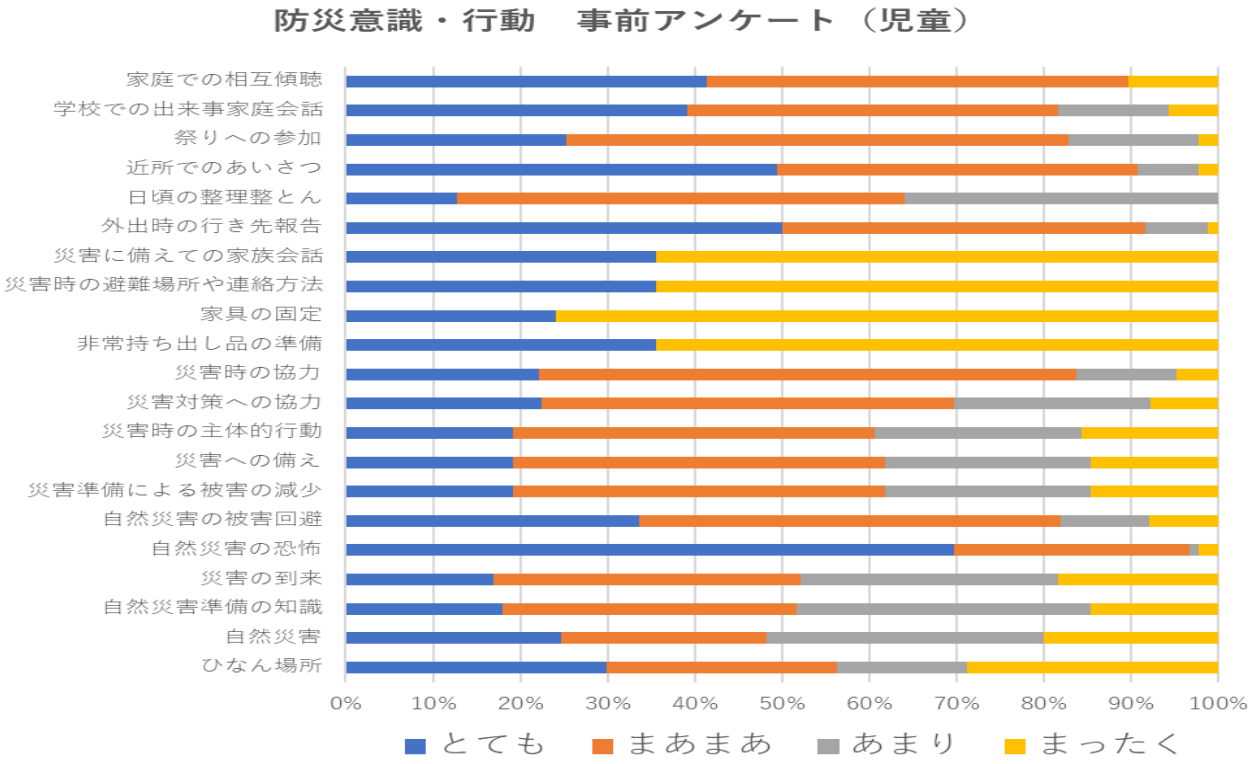
【防災掲示の全体】

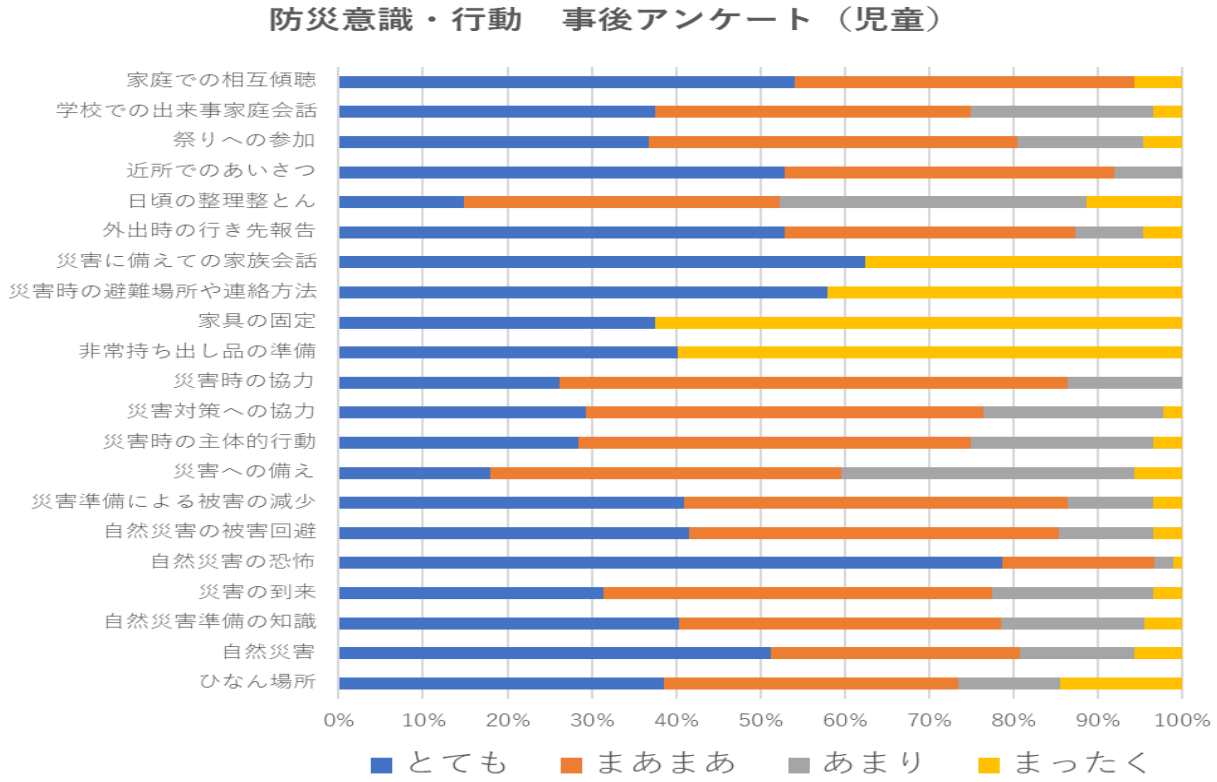


【振り返りカード】

⑽　事前・事後のアンケート

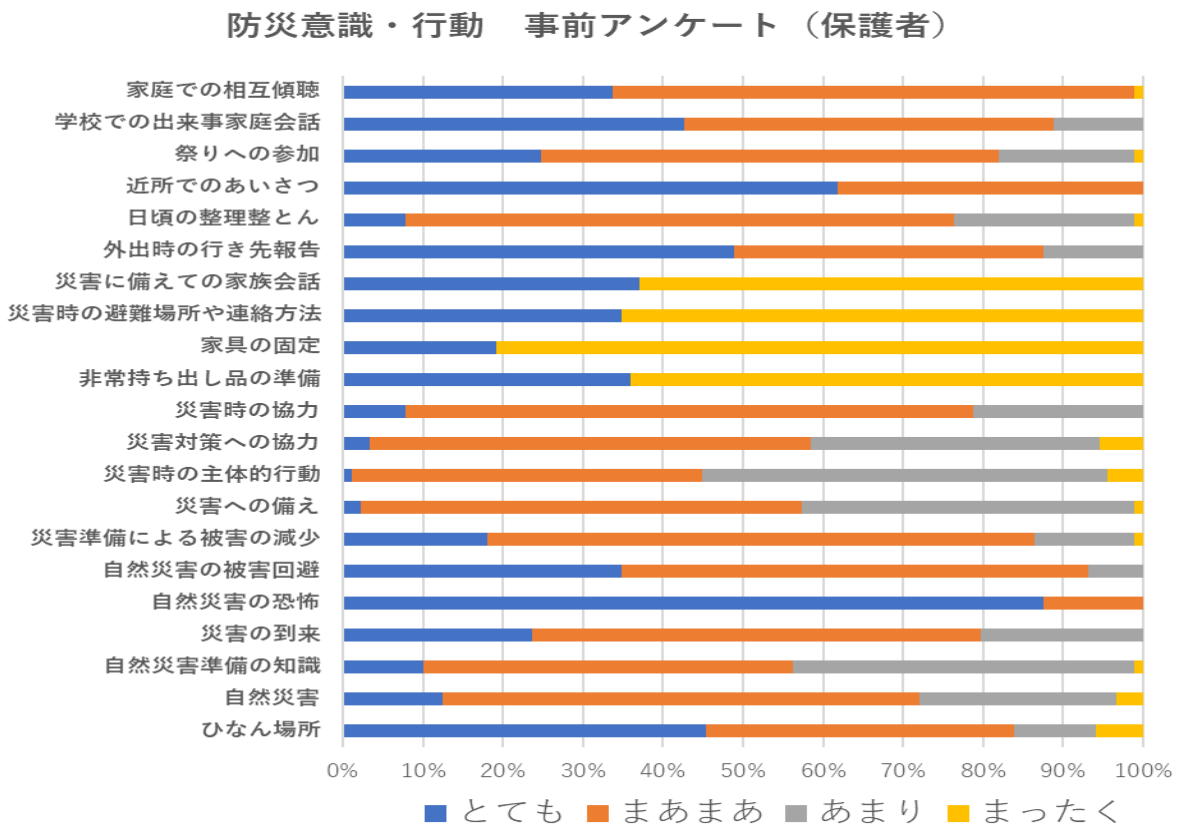
実態把握を行うために、愛媛大学の協力を得て、この事業の取組前後にアンケートを実施した。質問項目は全 18 項目で、アンケートの対象は、本校児童、保護者、そして、各地域の自主防災会の方にも協力いただいた。

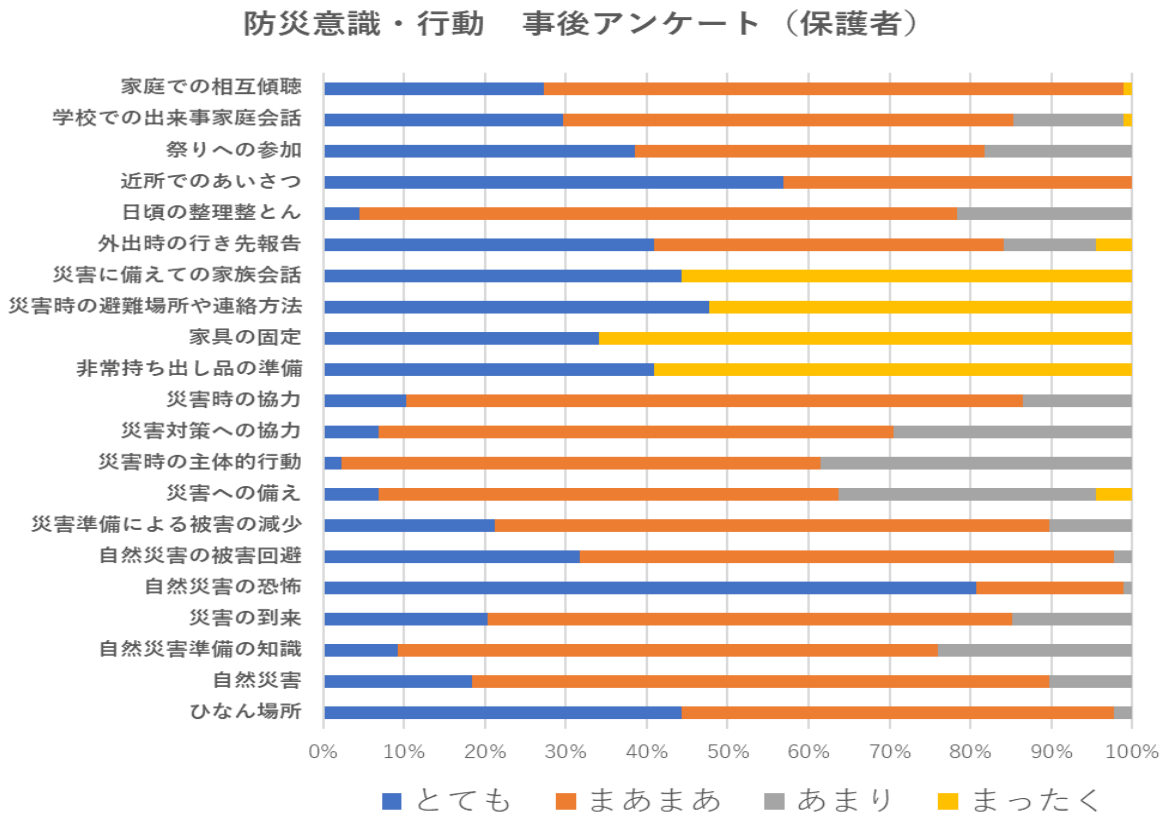
＜児童アンケート＞



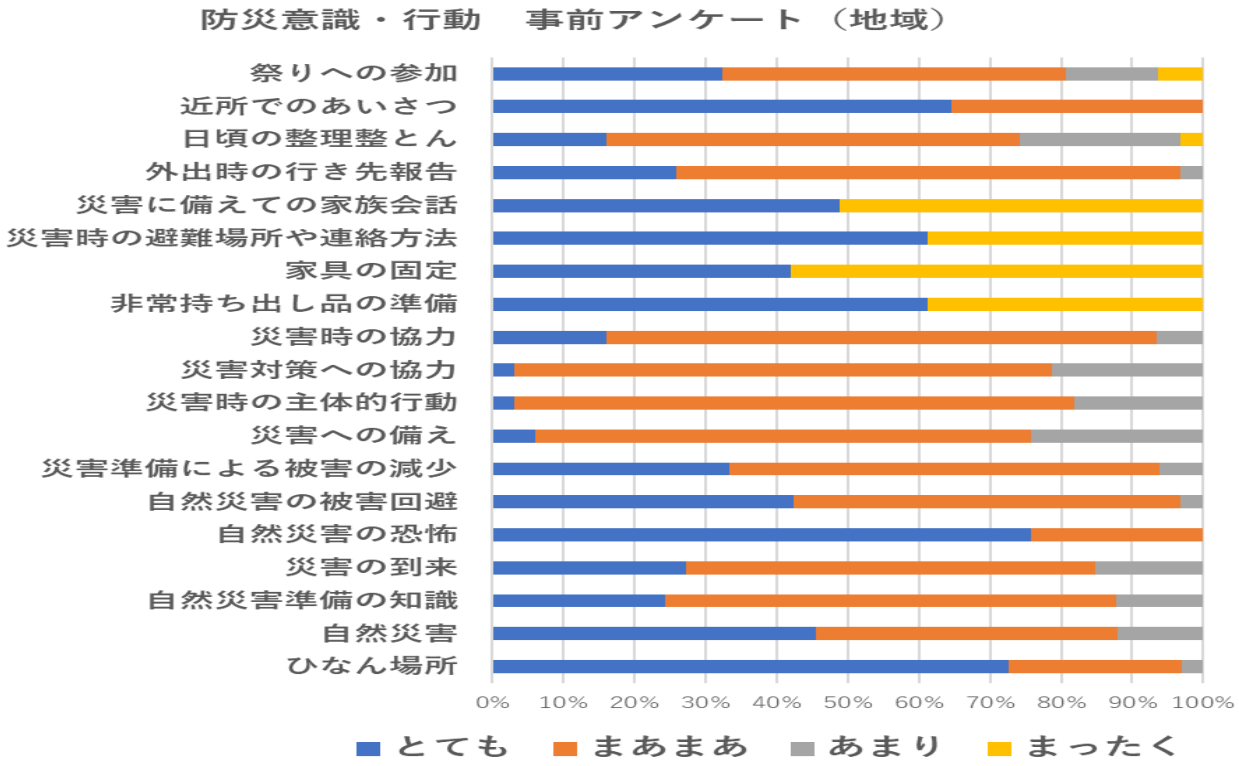


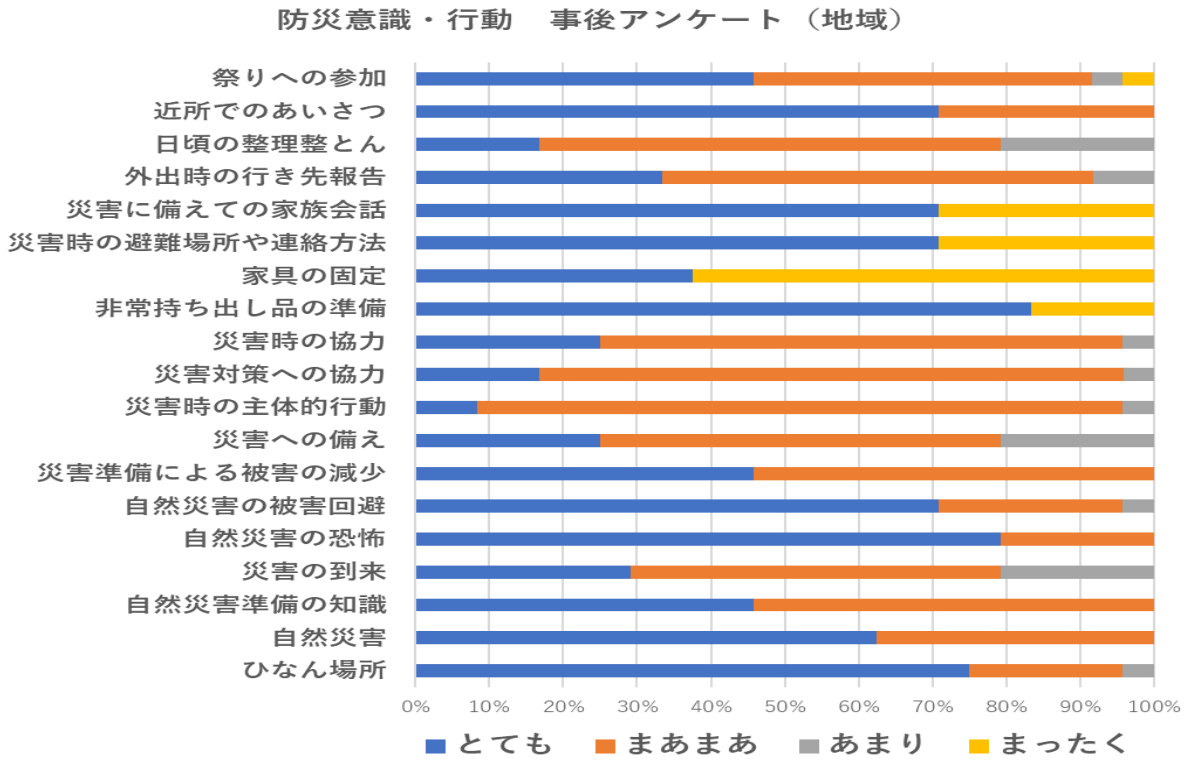
＜保護者アンケート＞


防災意識・行動　事前アンケート（保護者）
家庭での相互傾聴
学校での出来事家庭会話
祭りへの参加
近所でのあいさつ
日頃の整理整とん
外出時の行き先報告
災害に備えての家族会話
災害時の避難場所や連絡方法
家具の固定
非常持ち出し品の準備
災害時の協力
災害対策への協力
災害時の主体的行動
災害への備え
災害準備による被害の減少
自然災害の被害回避
自然災害の恐怖
災害の到来
自然災害準備の知識
自然災害
ひなん場所
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
とても
まあまあ
あまり
まったく


防災意識・行動　事後アンケート（保護者）
家庭での相互傾聴
学校での出来事家庭会話
祭りへの参加
近所でのあいさつ
日頃の整理整とん
外出時の行き先報告
災害に備えての家族会話
災害時の避難場所や連絡方法
家具の固定
非常持ち出し品の準備
災害時の協力
災害対策への協力
災害時の主体的行動
災害への備え
災害準備による被害の減少
自然災害の被害回避
自然災害の恐怖
災害の到来
自然災害準備の知識
自然災害
ひなん場所
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
とても
まあまあ
あまり
まったく

＜地域アンケート＞


防災意識・行動　事前アンケート（地域）
祭りへの参加
近所でのあいさつ
日頃の整理整とん
外出時の行き先報告
災害に備えての家族会話
災害時の避難場所や連絡方法
家具の固定
非常持ち出し品の準備
災害時の協力
災害対策への協力
災害時の主体的行動
災害への備え
災害準備による被害の減少
自然災害の被害回避
自然災害の恐怖
災害の到来
自然災害準備の知識
自然災害
ひなん場所
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
とても
まあまあ
あまり
まったく


防災意識・行動　事後アンケート（地域）
祭りへの参加
近所でのあいさつ
日頃の整理整とん
外出時の行き先報告
災害に備えての家族会話
災害時の避難場所や連絡方法
家具の固定
非常持ち出し品の準備
災害時の協力
災害対策への協力
災害時の主体的行動
災害への備え
災害準備による被害の減少
自然災害の被害回避
自然災害の恐怖
災害の到来
自然災害準備の知識
自然災害
ひなん場所
0%
10%
20%
30%
40%
50%
60%
70%
80%
90%
100%
とても
まあまあ
あまり
まったく

全体的に見ると、児童・保護者・地域とも肯定的な回答の割合が増えている。事前・事後アンケートの結果から、次の３点を読み取れる。

＜事前・事後アンケートより＞

◎　児童は、保護者が自分の話をよく聞いてくれると感じているが、家庭での防災に関する会話は、さほど高まらなかった。知識は増えたため、防災力は高まった。

◎　事前から主体的に行動する意識が高い児童が、学習した事後の知識・技能・判断力が向上しているため、大人に対して、声掛けをして行動できる力が増えた。保護者自身の防災知識・協力する姿勢は高まっている。今後も続けるとよりよくなる。

◎　学校での防災関連行事に地域の方々や保護者にも参加していただき、共に学ぶことで、集団的な自己効力感が上がっており、地域の防災力の向上がうかがえる。

３　取組の成果と今後の課題

○　学校防災マニュアルを全職員で再点検をすることで、多面的に見ることができ、学校や地域の特性を考慮しながら、改善することができた。

○　アンケート結果から課題を明確にし、目指す児童像や研究の仮説を立て、計画的・系統的に実践を行うことで、防災に対する知識を高めるとともに、自らの命を守り抜くために主体的に行動する児童を育てることができた。また、教職員についても講話や先進地視察で知識や技能を高めることができた。

○　専門家や専門機関との連携により、児童は学校だけでは学ぶことのできない体験をしたり、知識や情報を得たりすることができ、保護者や地域・教職員の防災意識も高まった。

○　参観日やキャンプなど、学校から場所や時間を広げることで、地域を巻き込んだ防災教育を推進することができた。大人も子どももそれぞれの立場で防災・減災について考えることができるようになった。

●　災害はいつ起こるか分からず、今後も繰り返し学んでいくことが大切である。保護者、地域の方々と思いを共有しながら、今後も防災について学ぶ機会を確保していく必要がある。

●　今回の事業で、拠点校は十分な取組ができたと感じているが、市内各校にこれを広げていく必要がある。

●　避難所運営に関する自主防災組織と学校との話合いは、まだ進んでいない地域もある。関係機関と連携しながら進めていきたい。